肝臓がん検診について

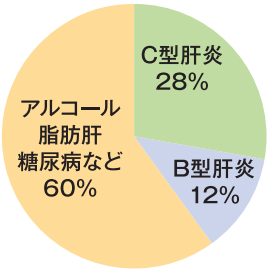
肝臓がんの特徴

本県の肝臓がんの死亡者数は全国で10番目に多くなっています。(人口10万人対:令和2年人口動態調査より)

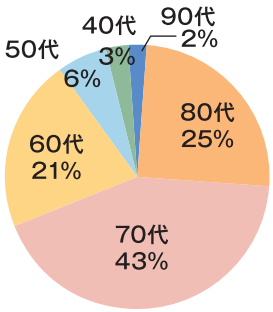
肝臓は「沈黙の臓器」といわれており、「がん」ができても症状が出ないことがほとんどです。肝臓がんになりやすいのは、「ウイルス性肝炎、アルコール、喫煙、肥満、脂肪肝、肝硬変、糖尿病、高齢者、男性」といわれています。また年齢では60代から増加し、70代以上が約7割を占めます。

このため、これらに該当する方は積極的に肝臓がん検診を受けてください。

肝臓がんの原因 (2021年)



肝臓がんの年齢 (2021年)



第24回九州肝癌研究会資料より

腹部エコーの様子

肝臓がんの検査方法

肝臓がんの検査方法として、腹部超音波検査(腹部エコー)と血液検査(腫瘍マーカー)があります。B型やC型ウイルス性肝炎、アルコール・脂肪肝・糖尿病が原因の非ウイルス性肝硬変では、3~6か月間隔での検診が望ましいとされています。もし検診で肝臓がんが疑われた場合は、速やかに肝臓がん検診精密検査実施医療機関を受診してください(実施医療機関は巻末参照)。

メッセージ

- 日本では、肝臓がんの原因として従来C型肝炎が最も多かったのですが、2000年代からアルコール・脂肪肝・糖尿病が原因の非ウイルス性肝臓がんが増加してきています。飲酒が多めの方、糖尿病で治療を受けている方はぜひ肝臓がんの検査を受けてください。ご自身がウイルス性肝炎にかかっていることを知らない方もまだ多くいらっしゃいます。輸血をされたことがある方、身内にウイルス性肝炎の人がいる方、血液検査で肝機能異常を言われた方はぜひ肝炎ウイルス検査を受けてください。
- 肝臓がんは進行がんの状態では治りにくい病気ですが、早期がんの状態で発見できれば多くの治療法があり、完全治癒も望めます。このため、肝臓がん検診を受けることは極めて重要です。